

沖永良部島の民謡歌手・川畑先民インタビュー

高橋美樹

はじめに

本稿は、^{おきのえらぶじま}沖永良部島¹⁾を代表する民謡歌手・川畑先民のインタビュー記録である。幼少時代から三味線に親しみ、島内の地域行事などで活躍してきた川畑は、1980年代以降、沖縄県や日本本土での公演も積極的に行なっている。3時間以上に亘るインタビューでは、民謡や三味線奏法に対する川畑独自の見解がより鮮明に語られた。

また、沖永良部島は鹿児島県でありながら、地理的には奄美諸島と沖縄諸島の間位置している。このような地理的条件に起因する奄美・沖縄双方から影響を受けた島の文化が、川畑の語りによって浮き彫りにされた。島外から伝播及び受容した音楽文化が、島の人々によって受け継がれ、自文化として生きずいているのである。

インタビュー記録は、1. 川畑先民プロフィール、2. 川畑先民インタビュー、3. 川畑先民の音源資料の3部で構成する。これらの資料から浮かび上がる研究上の課題は多く、今回はインタビュー記録のみを掲載した。音楽家のライフストーリーを中心に研究を進めている筆者にとって、川畑のインタビューは大変、貴重な資料となった。これらの考察及び分析については、次稿を待ちたい。

1. 川畑先民プロフィール

かわばた・さきたみ。沖永良部島を代表する民謡歌手。

1932年、鹿児島県知名町上城^{かみしろ}生まれ。

ジュウテ（舞踊の地謡）だった祖父の影響で、満5歳から三味線を弾く。独学で三味線奏法や民謡を覚え、独自の『蛇皮線独習集』²⁾を作成・出版。1970年、民謡研究所を開設。1975年から知名町公民館講座の三味線教

室・講師を務め、後進の指導にあたる。1982年以降は、島外への公演活動も行ない、「琉球孤島うたの祭典」「奄美民謡の夕べ」「奄美 島唄フェスタ2000」などに出演。

沖縄民謡界の重鎮・知名定男³⁾が師と仰ぐ存在であり、1996年、「知名町・町制施行50周年式典」では川畑・知名による師弟共演が実現した。知名がプロデュースするネーネーズ⁴⁾も、沖永良部民謡をレパートリーとして歌い続けている。

2. 川畑先民インタビュー

2001年5月4日、川畑先民氏の自宅で実施したインタビューをテーマ別に整理し、掲載する。

(1) 【三味線との出会い】

高橋：初めに、川畑さんが民謡を歌うようになったきっかけをお聞きしたいのですが。沖永良部島では三味線を何と呼びますか。

川畑：この島では、サンシルと言います。

高橋：サンシルに触れるようになったきっかけを教えてください。

川畑：私の祖父⁵⁾は、この島の踊りをさせる三味線弾きだったんです。沖縄では地謡、ここではジュウテと言いますが、祖父はそれをしていました。祖父が三味線を弾いていたので、自分はそれをずっと聴いていたんですよ。ちょうど5才になった時に、三味線を自分でも弾けるかなあと思って、祖父に黙って三味線を取った。小さい頃から、調弦するのをずっと耳で聴いていたので、自分でもできるかなあと思ってやってみたら、すぐに調弦ができたんですよ。それから自分が知ってる歌を♪ポッポッポ、鳩ポッポ～と歌って、それが小学校1年の時、昭和12年頃です。曲がすぐに弾けて、それから自分が聴いていた、いろんな童謡を弾いたら、すぐに弾けて。こんなに三味線って弾きやすいものだなあと思って、それから弾き出したわけです。小学校3年の頃は、学校に行ったら先生が「川畑、家に行って三味線をとっておいで！」と言われて、でも、小学

校は家からかなり遠いんですよ。通っていた上城かみしろ小学校は今と場所は一緒だけど、家が遠かった。道も人しか通れない道ですからね。そういう道を走って行って三味線を取って、学校に戻って、教室に入って生徒の前で弾いてたんですよ。その時に弾いていたのが、今の《安里屋ユンタ》⁶⁾ですよ。あれをどんどん弾いて歌っていたんです。

高橋：その時、《安里屋ユンタ》はこの島に入っていたんですか。

川畑：いや、ちょっと伴奏の弾き方は違いますけどもね。

高橋：歌のメロディー・ラインも微妙に違いますか。

川畑：はい。90%は似ていますけどね。

高橋：おじいさんも《安里屋ユンタ》を歌っていたんですか。

川畑：じいちゃんは昔の島踊り。沖縄の踊りも、ここでは島の踊りとして踊っていましたからね。

高橋：踊りの地謡をジュウテと呼ぶんですね。

川畑：そう、踊りをさせる弾き手をジュウテと言うんです。普通の民謡を弾いて遊んだりする人には、ジュウテとは言わないんです。私はジュウテじゃなくて、民謡を主にやっています。元々、住んでいた家は、この集落ではなかったんですよ。上平川かみひらかわで、父も母も、そこの出身です。

(2) 【レパートリーの拡大】

高橋：三味線を弾くようになった後、沖永良部の民謡も歌っていたんですか。

川畑：そう、歌さえ知っていたら、何でも弾けるんです。それと自分が歌わなくても、誰かが歌えば、それに合わせて弾くことができたんです。

高橋：曲目でいうと、どのような曲ですか。《いちきゃ節》とか。

川畑：いや、《いちきゃ節》は、その頃は聴いてはいたんですけども、本格的に弾いたのは学校を卒業してからですね。《いちきゃ節》というのは一番、難しく、沖永良部の代表的な歌ですから。

高橋：じゃあ、学校を卒業してから、どなたかに弟子入りされたんですか。

川畑：全然、これっぽっちも他人に教えてもらったことはないです。青年になってから、一応、民謡を本格的にしようと思って、一生懸命やっていたんです。「あそこの集落に歌の上手なおばあちゃんがいらっしゃる」と

聞いたら、三味線を持って、どこにでも歩いて行って、歌を聴いて合わせていたんですよ。そして、自分で覚えたんです。

高橋：じゃあ、聞き覚えというか、そばで歌ってるのを聴きながら合わせていって、だんだん覚えていった。

川畑：そうそう。だから、どこに行っても、どんな人が歌っても、すぐに合わせられるようになったんです。

高橋：それぞれ歌い手さんは調弦が違いますよね。そういう調弦もですか。

川畑：そう、声の高さね。だから歌わせてみて、その声に合わせるんです。

高橋：あの頃は、三味線教室はまだない頃ですよ。

川畑：ありません。だから、昔は教えるというのは、一対一で三味線を持って「ここはこう、次はこう…」と耳で聴いて、指を見て、自分で練習です。楽譜というのはないですから。

高橋：自分が好きな歌い手をみつけて、そこに行って、その人のレパートリーを教えてもらう。

川畑：そうです。三味線を練習する人は、昔は「遊び道」^{あし どう} ⁷⁾ といっ、広場で輪になって、男の人は三味線を弾いて、女の方は歌って、夜の1時2時まででも、浅い月の晩などは遊んでいたんですよ。17歳の頃、上平川^{かみひらかわ}にTさんという、島でもNO.1の三味線が上手な男性がいらして、《いちきゃ節》を一度行って教えてもらえないかなと思って行ったんです。行って「すいませんが、自分も《いちきゃ節》の三味線を練習したいので、教えて下さい」とお願いしたんです。そうしたら、その方が「あなた何か1曲、自分が弾けるのを弾いてみなさい」と、言われたんです。その時にね、「自分はまだ三味線を弾けない」と言えばよかったですけど、もうどんどん弾いて歌ったんです。そして、歌い終わったら「あなたには教える必要ないから、もう自分でやりなさい」と言われてね、本当にその時はショックで、家に帰ったんですよ。後々、ずっと考えてみたらね、大丈夫と思ったんじゃないかな。あとから、そういう話を他人から聞いてね。もうそれっきり、他人に頼んだことはないです。全部、自分で、他人が弾く三味線を聴いて、歌を聴いて、どのように弾けば島の民謡にぴったり、島の音楽らしい音楽ができるかと、自分で研究してやったん

です。

高橋：じゃあ、ほとんど独学ですね。

川畑：もう 100%、独学です。弦の合わせ方から、何一つ他人に教えてもらったことはないです。

(3) 【兄弟で三味線 1 丁弾き】

高橋：この島では、集落や町の行事に、歌い手が出る機会がありますか。

川畑：昔も、敬老会というのが各集落であって、その時に呼ばれて行ったんです。私には兄貴が一人いて、小学校の頃から兄貴と 2 人コンビで、2 人で一つの三味線を弾いていたんです。今なら、楽譜があるから誰でもできるけど、その当時は楽譜はないし、よほど手が合わないと弾けないんです。兄貴と僕はそれができてね、^{かみひらかわ}上平川の敬老会に呼ばれて行って、字の人たちが集まってる中で弾いたんです。

高橋：じゃあ、観客は拍手喝采で…。

川畑：そうそう。集落の婦人会の人たちが踊りをしますね。だから、観客はみんな遠くで見えていたんですよ。自分たちが舞台上に上がったら、サ〜ッと前に出てきて。屋外でやってた時で、僕が小学生時代だけど。

高橋：じゃあ、川畑兄弟って、有名だったんですか。

川畑：そう。だから、結婚式にも呼ばれたりしたんです。その時も《安里屋ユンタ》とか、そういう曲を歌ったんです。そうしたら、前にいるお客さんが「使っていない手を上げなさい！」と言うんです。だから、2 人共、片手を上げて弾いた。何かごまかしてると思ったのか…。

高橋：お兄さんとは幾つ違いですか。

川畑：昭和 4 年生まれだから 3 つ違い。でも、19 才の時に亡くなりました。

(4) 【沖縄芝居の来島】⁸⁾

高橋：当時は、沖縄などから島に、劇団や舞踊団が来たりしましたか。

川畑：沖縄芝居が来て、島では那覇芝居と言っていた。妻の実家が学校の前で、まわりが山で門一つしか空いていないんです。だから、その屋敷を借りて、そこでお金を払って映画見たり、芝居見たりしていたんです。

普通の屋敷だと、どこからでも子どもが入れますでしょう。石垣から登ってきたり…。そこはそれができないんです。昔は屋敷を借りて、那覇芝居をやっていたんですよ。

(5) 【遊び道】

川畑：当時は、夜に「遊び道」で三味線弾いて歌ってね、それが唯一の楽しみ、娯楽です。昼間は今のよう機械はないから、鍬で畑を耕してね、一日中、耕して、夏の暑い日にもう疲れているのにね。晩になると、永遠に歌が終らないんですよ。晩になると、元気が出てね。三味線持って、どこまでも歩いて行きよったです。

高橋：その「遊び道」というのは、いつ頃までありましたか。

川畑：戦後もずっとありましたよ。1953年に奄美諸島が本土復帰してからも、あったかもしれない。昭和35年くらいまであったんじゃないかな。昭和40年くらいにオートバイが入ってきたけど、オートバイが入ると、道路で遊べないんですよ。交通妨害になりますから。その頃はオートバイもないし、何も交通には問題ないから、道路の真ん中でも平気で輪を作って遊んでいたんですよ。人は歩いてしか通らないでしょう。だから、遊んでいたら、通る人は喜んでね、ここに座り込んで歌を聞いたり、歌ったりしていましたよ。

(6) 【沖永良部島外での公演活動】

高橋：川畑さんが沖永良部島以外で公演活動をするようになったのは、いつ頃ですか。

川畑：昔はなかったですね。

高橋：名瀬市（奄美大島）に演奏に行かれるとか。

川畑：それは、仕事をしている時期に、何回かは出ました。

高橋：そういう活動があって、奄美の唄者の方との共演も、だんだん増えていったんですか。

川畑：そう。坪山豊さんとは東京などで、20年以上ずっと一緒ですから。

高橋：その頃は、唄者との交流は奄美の方が多かったのですか。

川畑：そう。今のように、いろんな所を回って、奄美の唄者の人たちと知り合ったわけです。それまでは、沖縄ですから。

高橋：じゃあ、沖縄に行く方が早かったのですか。

川畑：そう、昔から沖縄ですから。文化がみんな琉球文化ですから。「奄美民謡の夕べ」とか、そういうのを奄美がやりだして、それから奄美とは親しくしています。

高橋：その頃は、日本本土でも、奄美民謡関連のイベントをやるようになったのですか。

川畑：東京の奄美会、関西の奄美会などが主催です。奄美の各島々から唄者の代表を呼んでね。ほとんど奄美群島の人には地元の奄美会に入っていますでしょう。自分の島の人が出て来ないと、見に行かないんです。与論から1人、沖永良部から1人、徳之島から1人、そして、奄美大島からは5、6名くらいの合わせて10名くらいでやるんですよ、2時間くらい。

高橋：出演者が片寄ると、お客さんの入りが悪くなるのですか。

川畑：やっぱりそれはありますね。沖永良部から私が行くのと、行かないのとは、沖永良部出身者の集まりが違いますよ。

高橋：沖縄本島でも、奄美民謡関連の公演がありますよね。

川畑：沖縄にも行きましたよ。宜野湾市民会館は2回かな。沖縄タイムス・ホール、那覇市民会館でもやりました。

(7) 【後継者の育成～楽譜の作成～】

高橋：民謡を他の人に教えるようになったのは、いつ頃ですか。

川畑：本格的に教えるようになったのは、27年程前になります。その時から楽譜を考えたんです。教えようとしても、今の時代は昔のように（一対一）できませんからね。その時に自分で楽譜を作って印刷してもらって、それを皆にあげて、教えていたんです。

高橋：それはどういう楽譜ですか。沖縄のくんくんしー工工四みたいな楽譜ですか

川畑：工工四から翻訳したものです。これ（滝原康盛 著『正調 琉球民謡 工工四』⁹⁾は工工四ですよ。これは一番新しいもので、11巻です。

高橋：《花》と《島唄》が載ってる最新版ですね。

川畑：そうです。（自作の『蛇皮線独習集』を見せながら）こういうふうに、3本線を引くんです。で、これは三味線の弦で3本でしょう。これが一番手前の太い方から、一弦、二弦、三弦というように書いてね。

高橋：これは川畑さんのオリジナルですか。

川畑：そう、私がこれを開発したんです。現職時代は、こういうふうに紙に書いてやっていたんです。公民館講座の講師を昭和50年から頼まれて、1年間はただ紙に書いて、朝、出勤する時に知名町公民館に持って行って、「これは今晚の資料だから、印刷しておいて下さい」と頼んでいたんです。でも、もう明日、教室という日の前の晩は、朝の1時、2時まで自分一人で楽譜を作らないといけなくて、もうこれは続かないと思ってね。今度はこれを本にしようと思って、公民館に行って話していたんですよ。そうしたら、どういうわけか吉田さん¹⁰⁾（故人）も公民館にみえて、私が館長さんと話してるのを聞いて、「自分も実は、楽譜を作りたいと思ってる。同じ島で異なる人が楽譜を作るよりも、2人一緒にやらないか」と言われて、「いいですよ」と言ったのが、事の始まり。

高橋：吉田さんは何をされてる方ですか。

川畑：三線を作る人です。三線製作の工場をもっています。楽譜は吉田さんが製本していました。

高橋：公民館講座は、月2回ですか。

川畑：はい、当初は4回やっていました。

高橋：年代層は。

川畑：若い人では中学生も来ます。人数は最初は多いですよ。30名くらい来ます。でも、だんだん減ってきて、去年は最終的には5、6名かな。

高橋：残る5、6名はどのような年齢層ですか。

川畑：年輩ですね。30代や、たまには20代も入ってきます。講座に何回かは来るんですよ。でも、家庭の都合とか、いろいろあって来なくなる。やっぱり続けないと、三味線はできないですよ。家で復習しないことにはね。教室ではこの楽譜でやってますが、当時は、この楽譜を誰に見せてもわからなかったですよ。これはこう…と説明して。フラットやシャープも使って表記してますから。沖縄には半音はないんですよ。

《上り口説》を聞いても、本当はシャープがあるんですよ。でも、沖縄ではシャープは使っていない。だから、ちょっと音が足りない感じもするんです。沖縄と沖永良部の楽譜の違いというと、沖縄の音は音自体が少ないですね。歌の歌詞の数よりも少ないです。それと、歌の声の高さと三味線の音が違ってるところがあるんですよ、わざと、同じ音にしないで。ドの音を歌うのに、三味線はレの音を出したり、そういうのが沖縄の場合、たまにあるんです。沖永良部はそうじゃなくて、歌にピッタリ合った音を作るんです、私は。

高橋：歌と三味線が一体化してるんですね。

川畑：そう。それで、バチで返しを入れたりして、音が多くなるんです。

高橋：装飾音みたいな、引っ掛ける音が多くなるんですね。

川畑：そう。それと手で「クスグリ」、方言では「ガジグイ」と言いますが、ガジグイを入れて、沖永良部は微妙な装飾音を作るんです。沖縄の楽譜にはそういうのはないですね。だから、これ（沖縄の工工四）から翻訳する時も、この音はどうしてもほしいなあという時は、自分でも入れるんです。《花》と《島唄》にはなかったですね。《肝がなさ節》に2つか3つ、音を加えましたけど。

(8) 【ネーネーズと沖永良部民謡】¹¹⁾

高橋：ネーネーズも沖永良部島の民謡を歌っていますね。

川畑：《サイサイ節》《畑^{はる}の打ち^う豆^{まみ}》などを歌ってる。

高橋：知名定男さんとは、ネーネーズの「なーらび島唄ツアー」（1995年）の打ち上げ（沖永良部公演）で知り合ったと聞いていますが。

川畑：打ち上げの時、私が《畑の打ち豆》を歌ってるのを知名さんは聞いてますよ。それで、この曲を気に入ったみたい。そして、今度は「ネーネーズに歌わせる」と言って、私の所に電話がかかってきたんですよ。「歌詞を教えてください」と。すぐに書いてFAXで送ったんですよ。ネーネーズは、私が送った歌詞をそのまま歌ってます。そういうことがあって、知名さんは音楽の面でも、沖永良部が気に入ったんじゃないのかな。

高橋：沖永良部の民謡は、沖縄の民謡歌手も自分たちの民謡と同じように

歌っています。民謡酒場などでも、意識しないで歌ってますから。

川畑：歌詞も八・八・八・六で作っているから、歌いやすいんですよ。

高橋：メロディーも違和感なく歌ってると思いますよ。他に、知名さんは《永良部恋唄》¹²⁾ という作品を作っています。まだ、川畑さんにはお会いしていない時期に書かれた曲で。先日、インタビューした時に「なぜ、この曲を書かれたんですか」と聞いたら、「《永良部アンチャンメー小》を俺は歌えないだろうと思ったから、沖永良部風の唄を作ろうと思った。でも、結果的には、やっぱり《アンチャンメー小》寄りになった。きっと頭の中にあっただらうね」¹³⁾ と言っていました。

(9) 【変化する沖永良部民謡】

高橋：以前の沖永良部民謡と今の沖永良部民謡とで、変わったなと思われることはありますか。

川畑：私は昔、聞いたそのままの歌をずっと歌っています。三味線も昔、聞いた音をそのままです。でも、この島でも、ある人はちょっと変な歌い方をしたり、だからそれが本物になるんじゃないかと思って心配したりします。

高橋：こちらでは洋楽器を伴奏で入れることはありますか。この部屋にもエレキマンドリンがありますけど。

川畑：いや、ここの民謡には、今までそういうのはないですね。三味線と胡弓は入れますけど。胡弓は国頭くがみ（和泊町の集落名）では年輩の人が弾くんだけど、知名町で弾ける人は何人くらいいますかね。

高橋：じゃあ、民謡の伴奏は三線と太鼓ですか。

川畑：いや、民謡に太鼓は入らない。昔の民謡は三味線と胡弓ですね。だから、どうしても三味線と胡弓を残したいと思って、今、録音してるんです。¹⁴⁾ 胡弓も弾き手が少ないですよ。

高橋：胡弓は、歌のメロディー・ラインを追う形ですか。

川畑：そう。三味線は音が♪ポン ポン ポン～でしょう。胡弓は♪プ～プ～と歌ってるような感じがするんですよ。

高橋：一緒に歌う感じですよ。

川畑：そう。歌う人も歌いやすいと思うんです。ずっと音を引っ張っていきますからね。

高橋：胡弓は、楽器自体が難しいですから。ある程度、他人に聴かせられるようになるまでは時間がかかりますよね。

川畑：上手に弾かないと、胡弓はね。三味線はバチではじけばいいんですけど、胡弓は息を切らしたらダメでしょう。上手く弓を弾かないと、音が切れたり、♪ギーギーしたりしますから、難しいですよ。私は1年間、公民館で胡弓を教えてたんです。でも、難しいでしょう。胡弓用の楽譜も作ってありますが。私も楽器はあるけど、胡弓を何十年も弾いてなかったんです。弾く時間もないし、また弾こうとも思わないしね。三味線だけに一生懸命だったから。最近になって、音を録っておかないといけないと思って、やりだしたんです。

(10) 【CD アルバムの制作】

川畑：今、沖永良部島では、三味線を弾く人はいるけど、胡弓を弾く人がいないんです。だから、今度のCDは胡弓を入れてみて、どれだけ皆が関心を持つか…。14曲全曲¹⁵⁾に、胡弓を入れてあります。

高橋：レコーディングは、楽器ごと別々に録音しているんですか。

川畑：そう、みんな別々。三味線、胡弓、歌、囃子。そうしないと、後の調整ができませんから。

高橋：初めてのCDが、マルチトラック録音ですか。すごいですね。

川畑：好きですから。

高橋：曲作りなど、創作活動はされてますか。

川畑：是非、作りたいと思ってるんだが、なかなか手がまわらなくてね。(CDの曲目リストを見せながら)ここに《沖永良部^{ちやつきり}一切り節》と書いてますが、普通は《西目^{ちやつきり}一切り節》と言うんです。なぜかという、《一切り節^{ちやつきり}》は徳之島が本場ですので、西目に伝わって、それから沖永良部の全島に広がって、この歌い方になったんです。西目に伝わった当時の歌は違うんですよ。だから、「これは《西目一切り節》ではない」ということを言いたくて、《沖永良部一切り節》と書いたんです。「じゃあ《西目一

切り節》はどういう歌ですか」と聞かれたら、ちゃんと歌って聞かせますので。次回、出すCDには、《西目一切り節》を入れようと思っています。それともう一つ考えたのは、《孔雀節》ですが、これは《サイサイ節》の前に歌っていた歌なんです。ある古老の話だと、「《サイサイ節》が広く歌われるようになったのは、昭和17年に踊りが振り付けられて以来、婦人会などで盛んに踊られるようになった」¹⁶⁾ そうです。そして、この《孔雀節》が消えてしまった。それで、国頭辺りは《手酌節》と言ってるんです。でも、「手酌」って自分で入れて飲むことでしょう。全然、意味が違うんですよ。昔の人が歌っていたのは、酒場でおばあちゃんたちが盃に焼酎を入れて、この《孔雀節》を歌いながら男の人の肩や首を抱いて、歌いながらお酒をすすめたんです。これは接待の歌だから「手酌」じゃないんです。それを言いたくてね。これは字で示さないとわかりませんから、《御酌節》と書きました。昔の人は、《御酌節》と書いて、「ぐしゃく」「うしゃく」と読むかもしれないですね。昔の人は字を書かないし、言い伝えですから、だんだん「ぐしゃく」「うしゃく」と言って、それが孔雀になったんじゃないかと思います。言葉は《孔雀節》と言っても、「手酌」じゃないんだよということで、今回は「御酌」と書いて、フリガナを「くじゃく」と書こうと思っています。おそらく、昔やってたことを知らない人たちが、《手酌節》と言ってると思うんですけどね。

(11) 【自伝の執筆～我が三味線人生～】¹⁷⁾

川畑：実は今、民謡の本を書いてるんですよ。自分が満5才で弾き始めてから、今までの流れをね。他に、民謡についても書いてます。《一切り節》は徳之島が本場ですけど、どのように沖永良部に伝わってきたとか、《いんたぶれ犬田布嶺》がどうして沖永良部に伝わってきたとか、調べてね。

(12) 【知名定男との共演】¹⁸⁾

高橋：知名町のイベント¹⁹⁾で、知名定男さんとステージで共演する機会があったと思いますが。

川畑：ええ。前の晩も、ここ（川畑氏の自宅）で一緒に遊んだりしてね。

高橋：その時は、知名さんと一緒に沖永良部の民謡を歌ったりしたんですか。

川畑：そうです、知名さんと2人でね。沖縄の民謡と沖永良部島の民謡を比べて、どういう違いがあるとか話しながら。曲名は違いますが、似ている曲があるんですよ。そういうのを2人で歌ったりして。

高橋：《マーミナ節》が沖永良部島の…。

川畑：《孔雀節》です。《永良部百合の花》が《スンガー節》です。そういうのを2人で歌ったんです。

高橋：ステージで共演した時は、どういう感じでしたか。

川畑：大衆の人たちが聴いてますからね。「しっかり聴いてもらいたい」という感覚があるんでしょうね。聴いて、その違いを感じてもらいたいと。

高橋：じゃあ、事前に知名さんと打ち合わせをしたんですか。

川畑：それがおかしいんですよ。その前の晩にね、知名さんに私、言ったんです。「明日、2人でどんなふうにやったらいいかね」と。そしたら「打ち合わせする必要があるかな。2人は打ち合わせなんていらなんでしょう」と言われて。結局、何もしないで、いきなり本番ですから。

高橋：調弦を合わせるのもしですか。

川畑：そう、ステージで話しながら調弦を合わせてね。筑紫哲也さんの講演が終わるのを2人で待っていた。講演が終わったら呼ばれるという、そこまでは決めてあったんですけど。

高橋：そういう打ち合わせはあったけど、肝心の曲の打ち合わせはなしですか。

川畑：だからもう、どうなるかと思いました。いきなり呼ばれて舞台上がったら、僕に知名さんが話しかけてね。「沖永良部島ではこういう曲だけど、沖縄ではよく似たこういう曲があるんです。じゃあ、2人でこの曲を歌ってみましょう」と言って、そうして始まったんです。

高橋：60年代に、知名さんは喜納昌吉²⁰⁾さんと一緒に、沖永良部に来てるんですよ。²¹⁾

川畑：そう。私も聞きに行ったよ。知名さんが20代の時と言ってたかな。

高橋：喜納さんの《ハイサイおじさん》が沖縄で、大ヒットしてる頃ですよ

ね。

川畑：そうそう、ここでもその時、《ハイサイおじさん》を歌ってましたよ。知名さんは大阪育ちなんですよ。大阪にいた時に、いつも家の近くで沖永良部の《いちきや節》を歌って通る人がいて、それで、いつも沖永良部の民謡が頭の中に入っていたと」言っていました。²²⁾

(13) 【沖縄民謡 vs 沖永良部民謡】

高橋：沖縄の民謡は三線伴奏と歌がずれるんですか。

川畑：そう、沖縄の民謡は必ず歌が遅れます。歌の出だしが特にね。途中もありますけど、少ないですよ。ほとんど半拍ずれますね。三線を弾いて、バチが上がる時に歌が入る。そして、次の歌詞でまた次の音と合う。

高橋：沖縄の人はあまり意識してないと思いますけど。

川畑：沖永良部島は音とピッタリ合うようにしてね。沖縄の《ていんさぐぬ花》もそうです。「♪てい^{テン}んさ^{テン}ぐーぬー^{テン}」でしょう。(注：テンは三味線の音を表わす)

高橋：そうですね。半拍、歌があとですね。

川畑：だから、三線教室では「弦を打って、音を出してバチが上がる時に歌い始めなさい」と教えるんです。すぐにはできませんけどね。

高橋：沖永良部で使う三味線は、楽器自体は沖縄とっしょなんですか。

川畑：沖縄とっしょです。長さも同じですよ。

高橋：弦はどうですか。

川畑：弦も、今は沖縄とっしょになってます。

高橋：奄美の弦は使っていないんですか。

川畑：はい。沖永良部島でも、国頭くにかみ(和泊町)は奄美の弦が入ってますが。私も最初は奄美の弦で、その前に「シマジル」という沖永良部島の細い弦を使ってたんですよ。奄美の弦よりも細くて、やわらかい音が出ますけど。沖永良部の民謡は、本当はその沖永良部の弦で弾いた方がいいんですけど、三弦の一番細い弦がすぐ切れちゃうんですよ。弾きながら、プチッと切れたりして。私は沖縄の弦が好きですから、教室でもみんな沖縄の弦を使わせています。もし島の古い弦を付けてあったら、取りか

えてあげるんです。そうしないと、音が合わないですから。周囲がみんな沖縄の弦でしょう。1人が細い弦を使っても、細い音しか出ないから、弦を変えて同じ音にしないとね。

高橋：川畑さんは結構、キーを高くして歌いますよね。

川畑：練習は低いですよ。でも、本番になるとやっぱり少し上げないとね。

沖永良部の民謡は三味線自体も、キーを上げた方が聴いていていいんです、昔からそうだもの。だから、細い弦でキーを上げて歌う。沖永良部島は沖縄と奄美の間ですよ。音も、沖縄は低いでしょう。奄美は高いでしょう。沖永良部島はその中間で。同じ島の中でも、^{くにがみ}国頭は奄美の弦で、弾き方も荒くてバチバチ弾く感じですよ。

高橋：三線を弾くのは「バチ」ですか。

川畑：そうです、バチです。沖縄と一緒に水牛の角です。奄美は竹ひごで、弾き方も違いますから。

川畑：沖縄は工工四という立派な楽譜があって、弾いてますでしょう。だから、何人でも合うんですよ。この島は、この楽譜（『蛇皮線独習集』）でやってる人は合うんですけど、それ以外の方は皆、バラバラでしょう。合うはずがないんです。

高橋：楽譜の影響力は大きいですよ。

川畑：一つの楽譜でやればいいんですけど、10人が10人別々に、自分の思い思いで弾くのも、一つの文化ですからね。やっぱりいいんじゃないかと思います。自分の好きなように弾く。だから、これもあまり強くは言えないんですよ。また言うてはいけないと思います。

註

- 1) 鹿児島島から南へ 536 km、北緯 27 度線上に浮かぶ奄美諸島の一つで、面積 93.6 km²、人口 1 万 6 千人、知名町、和泊町の両町から成る。花卉農業が盛んで、エラブユリやフリーズアが有名。沖縄本島からは、船で 6 時間の位置にある。
- 2) 川畑先民と吉田治里との共著で刊行したオリジナル楽譜集。シリーズ①は 1976 年、シリーズ②は 1977 年に吉田蛇皮線楽譜研究所から発行。

- 3) ちな・さだお。民謡歌手、作詞・作曲家、プロデューサー。1945年生。幼少時代は関西で過ごし、1957年沖縄に移り、民謡歌手・登川誠仁に師事。12才の時、沖縄民謡『スーキカンナー』でレコードデビュー。1978年EP『バイバイ沖縄』、LP『赤花』で全国デビュー。90年代、沖縄ポップ・ブームの一翼を担ったネーネーズを結成し、国内外で公演を行なう。2001年4月「琉球音楽協会」を設立し、会長を務める。沖永良部島には、公演活動などで数多く訪れている。
- 4) 1990年、プロデューサー知名定男のもとで結成された女声4人グループ。1991年、デビューアルバム『IKAWU』発売。10年間で、CDシングル4枚、CDアルバム9枚を制作。民謡とポップの境界を越えた、新しい表現スタイルを国内外に発信した。《黄金の花》《あめりか通り》《平和の琉歌》など、沖縄の多面性を捉えた作品は、1999年、初代ネーネーズ解散後、2代目ネーネーズに受け継がれた。
- 5) 川畑佐栄：川畑先民の祖父。島で「ジュウテ」と呼ばれる舞踊の地謡をつとめた。
- 6) 1934年、日本コロムビアの沖縄民謡レコーディングため、竹富島の古謡《安里屋ユンタ》を宮良長包が編曲し、星克が作詞した作品。レコード化以降、日本本土でも流行し、替え歌なども作られた。
- 7) 沖縄で戦前まで行なわれていた「毛遊び^{もうあし}」と同様、原っぱで男女が集まり、歌を競いあう、民衆の娯楽。沖永良部島では、道に座って行なうこともあったようだ。
- 8) 沖永良部島における沖縄芝居の受容については、以下の記事に詳しい。
- ・高橋孝代「沖永良部島の芸能と沖縄3 沖縄芝居」『沖縄タイムス』2002年1月11日、15面。
 - 沖永良部島と沖縄芸能の関わりについては、以下の記事を参照。
 - ・高橋孝代「沖永良部島の芸能と沖縄1 住民意識」『沖縄タイムス』2002年1月9日、22面。
 - ・高橋孝代「沖永良部島の芸能と沖縄2 グムチ踊り」『沖縄タイムス』2002年1月10日、19面。
 - ・高橋孝代「沖永良部島の芸能と沖縄4 エイサー」『沖縄タイムス』2002年

1月15日、15面。

・高橋孝代「沖永良部島の芸能と沖縄5祝福と禁忌」『沖縄タイムス』2002年1月16日、22面。

9) 滝原康盛『正調琉球民謡工工四』第11巻、正調琉球民謡本流家元、発行年不明。(第1巻は、喜納昌永・滝原康盛の共著により1964年に発行)

10) 吉田治里。生業は三味線の製作。沖永良部島では唯一の三味線店を経営。2000年、逝去。

11) ネーネーズが、これまでレコーディングした沖永良部民謡・新民謡は、以下の通り。

・《永良部シュンサミ～永良部百合の花》(ネーネーズ、CD『IKAW Ū』、ディスク・アカバナー、APCD-1001、1991年) 所収。

・《サイサイ節》(ネーネーズ、CD『ユンタ』、キューンソニー、KSC2-16、1992年) 所収。

・《畑の打ち豆》(ネーネーズ、CD『夏～うりずん』、キューンソニー、KSC2-123、1995年) 所収。

・《永良部の子守唄》(ネーネーズ、CD『明けもどろ』アンティノス、ARCJ-69、1997年) 所収。

12) 《永良部恋唄》は、知名定男が作詞作曲した。ネーネーズのCD『あしび』(キューンソニー、KSC2-48、1993年) 所収。

13) 高橋美樹「沖縄ミュージシャン発奄美へのラブレター／知名定男(下) 多面体の実像」『南海日日新聞』2001年5月16日、4面。

14) 2001年、川畑は自主制作のCDアルバムを自宅でレコーディング中。

15) CDアルバムの曲目リストは、以下の14曲。

《沖永良部ちゅつきゃり節》《さとよ節》《畑^{はる}ぬ^{うちまみ}打豆》《犬田布嶺^{いんたぶれ}》《御酌^{くじゃくぶし}節》
《りんぐわ節》《かにがゆしんばる(うしうし)》《沖永良部数え唄》《さん
ご節》《ながくま節》《あんちゃめーぐわ》《子守唄^{くわーむいうた}》《いちきゃ節》《さいさい
節》

16) 先田光演編『沖永良部シマウタ歌詞集成』奄美共同印刷、1999年、p.176。

17) 川畑の三味線人生を取り上げた記事は、次の通り。

・「話題の最前線／沖永良部のジュウテ／命吹き込むメロディー／先祖の教訓

伝える唄遊び／民謡教室を主宰する川畑先民さん」『南海日日新聞』1999年6月5日、7面。

- ・「第1回沖永良部島唄と踊の世界」パンフレット（主催：南海日日新聞社・沖永良部郷土研究会）、1999年12月5日、pp.8-9。

18) 川畑と知名定男の対談、共演に関する記事は以下の通り。

- ・「知名町50周年式典／豊かな町づくりに努力／筑紫哲也氏の講演も」『南海日日新聞』1996年11月25日、6面。
- ・「共通メロディーで交流／知名定男、沖永良部の川畑氏」『琉球新報』1996年12月7日、24面。
- ・「対談知名定男&川畑先民／美しい旋律の島・沖永良部」『大島新聞』1997年1月1日、17-19面。
- ・「おはら／島唄歌い手拍子」『朝日新聞』1997年8月14日、21面。
- ・「第1回沖永良部島唄と踊の世界」『南海日日新聞』1999年11月28日、5面。

19) 1996年11月24日、「知名町町制50周年式典・講演」、於：知名町体育館。

20) きな・しょうきち。ミュージシャン、1948年生。父・昌永は、戦後の沖縄を代表する民謡歌手。1967年、喜納昌吉&チャンプルーズ結成。1977年、EP『ハイサイおじさん』で全国デビュー。その斬新な表現スタイルは、日本のポピュラー音楽界に衝撃を与えた。1980年代半ば以降、活動を一時中止していたが、1990年に活動を再開。「すべての武器を楽器に」をスローガンに掲げ、幅広い活動を展開する。代表作『すべての人の心に花を』はアジア各国でもカバーされ、1990年、この作品でNHK「紅白歌合戦」に出場した。

21) 1960年代、知名定男と喜納昌吉の沖永良部公演については、以下の記事に詳しい。「対談知名定男&川畑先民／美しい旋律の島・沖永良部」『大島新聞』1997年1月1日、17-19面。

22) 知名定男は、以下の記事の中でも、幼少時代に聴いた沖永良部民謡について語っている。

高橋美樹「沖縄ミュージシャン発奄美へのラブレター／知名定男(上)奄美・

島唄への期待」『南海日日新聞』2001年5月9日、4面。

3. 川畑先民の音源資料

【CD】

- ・《さいさい節》《いちきゃ節》唄三線：川畑先民 他
(CD『南海の音楽／奄美』、キングレコード、KICH-2027、1991年) 所収。
- ・《さいさい節》唄三線：川畑先民、囃子：川畑セイ子、先山ナツ (CD『世界民族音楽大集成 南西諸島の音楽Ⅱ』、キングレコード、KICC-5506、1992年) 所収。
- ・川畑先民『沖永良部民謡集第1集』、自主制作盤、KSAR-0201、2002年。
(唄・蛇皮線・胡弓：川畑先民、はやし：川畑セイ子)

【ビデオ】

- ・《西目ちゅっきゃり節》《アンチャメグワ》唄三線：川畑先民
(VHS『第1回沖永良部島唄と踊の世界』南海日日新聞、2000年) 所収。